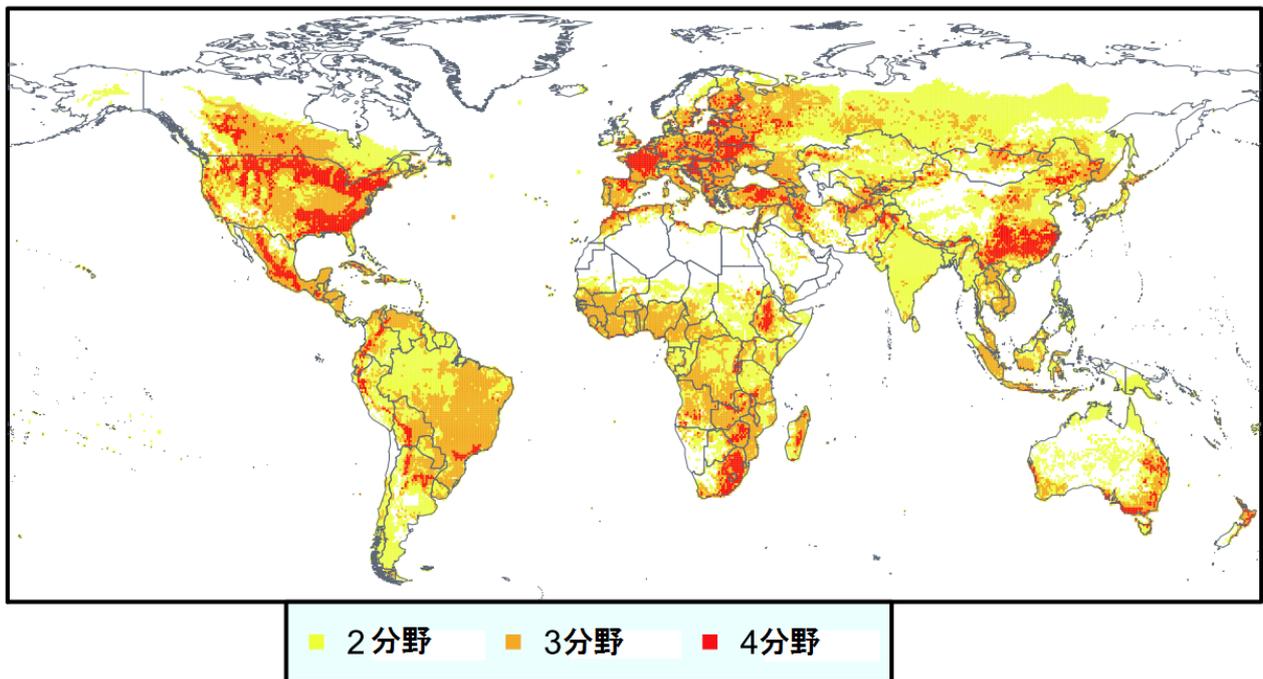


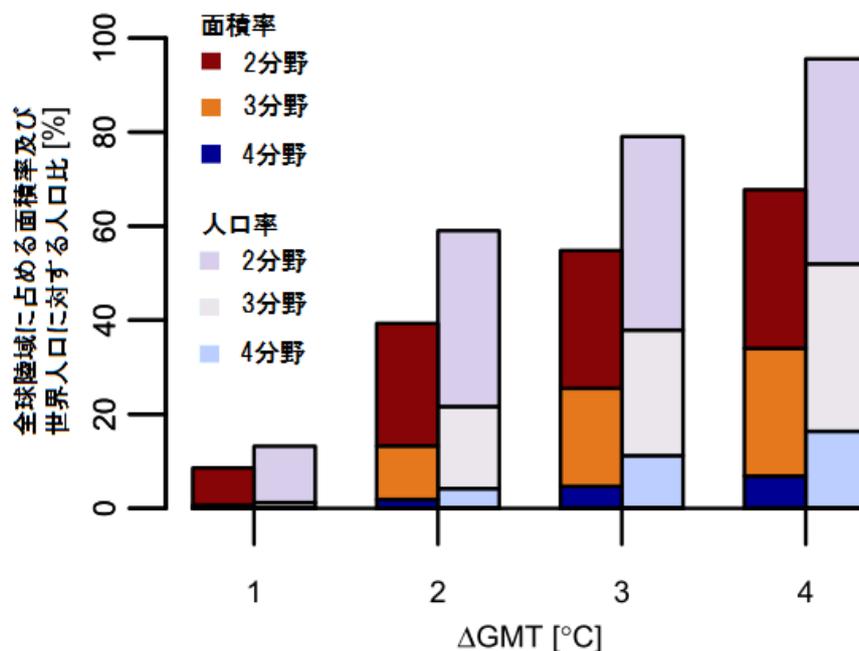
添付資料：

図 1)



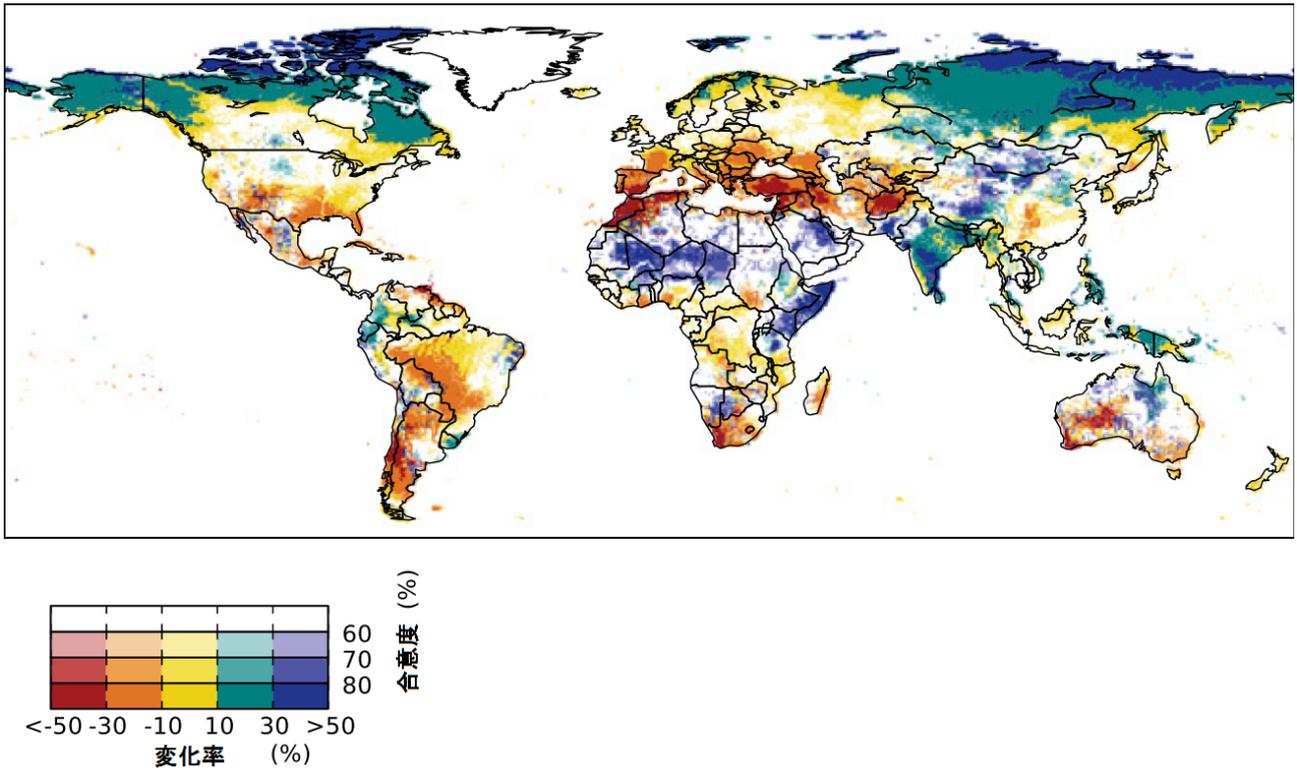
今回の実験設定では5つの気候モデルの予測する将来の気象データを各分野の影響評価モデルに与えている。上図は各分野について10%以上のモデルで傾向が一致した場合の結果を有効とし、それぞれ対象とする4分野のうちいずれか2、3、4分野に共通して温暖化影響が表れる地域を示している。

図 2)



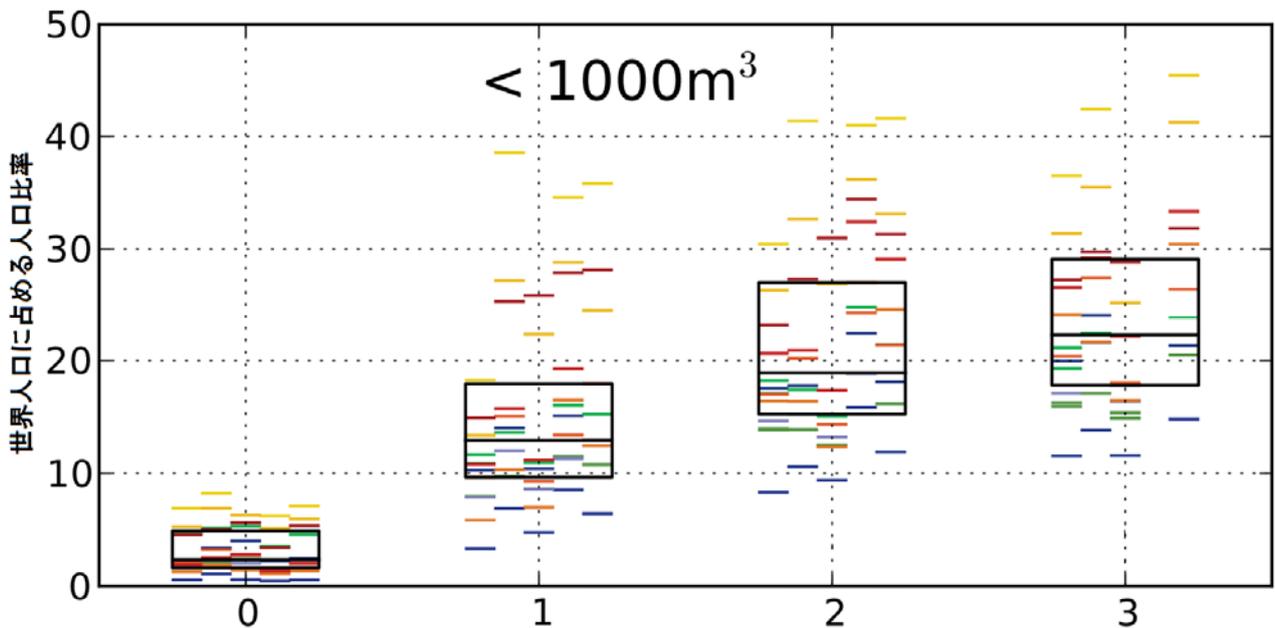
ΔGMT に対する閾値を超えている地域の面積率（濃色）とそこに暮らす人口率（淡色）の推移。

図 3)



Δ GMT が 2 度の場合の年平均の河川流量の変化。色は増減の傾向を表しており、濃淡は複数の“気候モデルと影響評価モデル”の組み合わせの間での合意度。濃色箇所は淡色箇所よりも結果の信頼性が高いと言える。

図 4)



各 Δ GMT に対する水ストレス人口の推移（年間に得られる河川からの水資源が一人当たり 1000m^3 未満の場合）。一つの Δ GMT について、縦の並びは 5 つの異なる気候モデルからの入力の違い、色は影響評価モデルの違いを表している。黒いボックスの上下はそれぞれ四分位範囲を示し、ボックスの中にある黒いラインが全ての組み合わせのメディアン（中央値）となっている。